

# 過疎地域青年の生活意識

— 在都市青年のUターン可能性 —

小 川 一 夫

深 田 博 己

(1976年9月20日受理)

昭和30年代以降、農山村から巨大都市への急激で大量の人口移動が生じ、都市では過密現象が、農山村では過疎現象が問題化し始めた。過疎・過密の問題が、昭和30年代日本の高度経済成長の所産であることは周知の事実である。経済の高度成長は、産業間の生産性格差、つまり地域間の所得格差の増大に集約される経済構造の変化を招来したが、都市地域への急激な人口流出による農山村地域の過疎現象は、ただ単にこのような経済構造の変化のみに帰因するわけではなく、むしろ、農山村地域の人々の生活意識の都市化という意識構造の変化に、より直接に関連していると思われる。

この点に関して、今井(1968)は、過疎進行の原因の1つとして、道路網の整備・交通機関の発達やテレビの普及の影響による、都市と農山村における生活意識の平準化と封建的な家族制度、共同体的秩序の崩壊をあげている。結城(1970)も、テレビなどのマス・メディアの普及によって都市文化が農村に伝達され、出稼ぎなどの都市生活の体験が農村の都市化傾向に拍車をかけ、その結果もたらされた思考、行動、生活様式の都市化傾向こそ、過疎化を進行せしめた重要な要因の1つであるとみているし、池上(1975)は、過疎化を導いた諸要因として、所得格差、生活環境と並んで主体的意識を取り上げている。さらに、米山(1969)は、さまざまなコミュニケーション手段による文化の伝達、特に都会文化のテレビによる伝達と、都会物資の流入という実態から、過疎現象は現代日本における“文化変化”であると考えざるを得ないとさえ述べている。

過疎現象が地域住民の意識構造の変化にかなりの程度帰因するものであることは、上記の諸論文からも明らかであり、そこにはおのずと、過疎を「人の問題」として究明することの重要性が生じてきて当然である。

たとえば、続ら(1970)は、過疎をもたらす人口流出現象を深く個々の人間の生き方につながる問題と見る立場に立ち、米山(1969)は、過疎の問題をなまなましい人間の問題として考え、個人の決断の問題としてとらえる姿勢を示している。また、池上(1975)は、

過疎を地域社会における人々の人間らしい生活の確保の問題であるとの視点において考えたいとしており、安達(1973)は、過疎化の内部メカニズムの1プロセスを形成する住民意識の後退というメタフィジカルな面を重視しなければならぬと主張している。

これらの研究者たちは、いずれも「人の問題」として過疎問題に取り組む姿勢を示しており、過疎問題に関する心理学的研究の意義と必要性が痛感される次第であるが、遺憾ながら、これまでのところ過疎問題に対する心理学的アプローチは極めて少なく、研究の今後の発展に期待しなければならないのが現状である。

ところで、過疎現象は、人口的側面、経済的側面、社会的側面を複合的に包含する極めて複雑な現象であり、池上(1975)の指摘に待つまでもなく、過疎の概念に関する定義は、学術用語としても、公式用語としても、いまだ統一されておらず、続ら(1970)があえて「いわゆる過疎地域」という表現を使用せざるをえなかった根拠もここに存在する。過疎を、生活共同体としてのムラの崩壊(安達, 1973)、基本的人権の侵害(結城, 1970)、という観点から追求する立場もあるが、われわれは、暫定的に最も一般的で抱括的な過疎概念を採用しておく。つまり、過疎とは、大量の人口流出によって人口の自然減に脅やかされ、これまでの生活水準の維持や生産機能の保持が困難になる状態を意味する。

こうした過疎現象は一律な形態をとるものでなく、一般には、東北地方に顕著な出稼ぎ型(東日本型)と中国地方に代表される挙家離村型(西日本型)の2形態が知られている。これに、中部地方の中間型を加えることもある。他方、過疎に関して、市町村間格差よりも中心部と周辺部間の市町村内格差の方が大きいという微視的レベルからみた過疎形態も報告されている(山野井, 1973)。これまで、われわれが一連の過疎研究の中で対象地域とした中国山地は、挙家離村型の過疎の先発地帯・多発地帯として注目を集めてきたところであり、この地方における独自の過疎対策や調査報告(たとえば、内藤, 1971; 乗本, 1970; 大谷,

1970 ; 寺本, 1969 ; 早川, 1972 ; 中国新聞社, 1967, 1968) も刊行され, 行政レベルでの対策あるいは調査の類はかなりあるように思われる。

ところで, 安達(1973)は, わが国の過疎地帯を3区分し, 中国地方などの過疎化の進行は他地域に先がけて鈍化しはじめたと述べ, 若者のUターンについても触れている。一度都市へ流出した人口の一部が再び郷里に環流するUターン現象が生じていることを, 小川・深田(1975, 1977)は諸種調査結果から指摘し, 中国山地における青年のUターン行動について論及した。その中で, 郷里の村を離れて現在都市に居住している在都市青年が将来Uターンする可能性をもつことが示唆された。すなわち, 在都市青年の基本的な生活態度を検討したところ, 離村時には都市志向的傾向が非常に強かったにもかかわらず, 都市生活を続けるうちに, 次第に村志向的方向へと態度変容が生じ, 現在では, 都市志向的態度を示す者と村志向的態度を示す者が半々の割合でみられるに至った。そして, 在都市青年の現在の基本的な生活態度は, 実際にUターン行動をとって, 現在郷里に居住しているUターン青年の帰村時の態度とほとんど差異のないことが判明し, 在都市青年がUターン予備軍としての性格を備えているのではないかという点が強く示唆された。このほかにも, 流出青少年の一部に潜在的Uターン型の者がいることを報告している研究もある(相原, 1973)。Uターン現象は過疎地域の再生にかかわる非常に重大な問題であるので, 本研究では, 先の研究における示唆を受けて, 在都市青年のUターン可能性の問題を, 彼らの生活意識の分析を通して解明したい。

## 方 法

### 1 調査対象

中国山地の過疎地である島根県飯石郡頓原町, 広島県山県郡筒賀村, 佐伯郡吉和村の3地区を郷里に持つ年齢19歳以上29歳以下の青年男女を調査対象とした。本研究では, 郷里を離村して現在都市部(広島市を中心とする瀬戸内地方, ただし頓原地区のみこれに京阪神地方が加わる)で生活している在都市青年を分析対象群とし, 郷里から都会へ出て, 再び郷里へ引き揚げて帰り, 現在郷里に居住するUターン青年を比較群とした。

### 2 調査の概要

調査は, 主として当該地区の役場, 教育委員会等の協力を得て対象者名簿を作成し, 郵送法を用いて昭和49年から50年にかけて実施した。在都市群に関しては, 頓原地区86, 筒賀地区66, 吉和地区31の計183,

Uターン群に関しては, 頓原地区42, 筒賀地区23, 吉和地区7の計72の有効資料が得られた。調査票回収率は在都市群59.7%, Uターン群81.3%であった。用いた過疎調査票は, 在都市青年用35項目, Uターン青年用36項目で, 離村時から現在に至るまでの生活意識を問う内容のものであった。

### 3 分析手続き: 在都市群の類型化

先に述べたように, 在都市青年の基本的な生活態度は, 離村時から離村後の現在にかけて, 都市志向から村志向へと大きく変容していた。そこで, われわれが先の研究で, Uターン青年の態度変容パターンを離村時と帰村時の基本的な生活態度の組合せから決定したのに対応させる意味も含めて, 離村時と離村後の現在の基本的な生活態度の組合せから在都市青年の態度変容パターンを求めた。その結果, 都市志向一貫型72名, 都市—村志向変容型71名, 村志向一貫型31名, その他9名(村—都市志向変容型7名, 回答不完全2名)が得られた。以後の分析では, このうちの主要3パターン, すなわち都市志向一貫型, 都市—村志向変容型, 村志向一貫型(以下, それぞれ都市型, 変容型, 村型と略記する)を使用する。こうして得られた在都市青年の態度類型を分析軸にして, 彼らの生活意識を検討し, さらに, それとUターン青年の生活意識とを比較することによって, 在都市青年のUターン可能性を探りたい。

なお, “方法”の詳細は, 小川・深田(1977)を参照されたい。

## 結果および考察

### 1 在都市青年における生活意識の態度類型間比較

#### (1) 対象者の特性(表1参照)

各類型間の対象者の特性を $\chi^2$ 検定で比較した結果, 村型は変容型と都市型に比べ, 男子, 年長者, 既婚者の割合が大きいことがわかったが(自由度1ですべて5%以下の危険率で有意), 跡取りや学歴には差がなかった。ここでは対象者の特性差は一応無視して, 態度類型と生活意識との関係を検討する。以下分析における $\chi^2$ 検定の結果はすべて表6にまとめてある。

#### (2) 離村時の生活意識(表2、表6参照)

当初, 都会へ出ようと離村を決意した段階で, 都市型は都市永住予定であった者が多く, 変容型と村型は逆にUターン予定であった者が多い。離村について相談した者は, 都市型と変容型に比べ村型で少なく, 離村をすすめられた者は, 変容型と村型に比べ都市型で少ない。離村に対する家族の態度はおおむね賛成であった場合が多いが, 特に都市型でその割合が高い。

表1 類型別在都市群とUターン群の内訳

項目	在都市群			Uターン群	項目	在都市群			Uターン群
	都市型	変容型	村型			都市型	変容型	村型	
性					年齢				
男	51.4	45.1	74.2	54.2	19歳	16.7	14.1	6.5	2.8
女	48.6	54.9	25.8	45.8	20 "	13.9	16.9	16.1	2.8
結婚					21 "	25.0	19.7	6.5	8.3
既婚	12.5	14.1	35.5	22.2	22 "	15.3	8.5	6.5	18.1
未婚	86.1	81.7	54.8	73.6	23 "	5.6	8.5	9.7	15.3
跡取り					24 "	5.6	12.7	12.9	6.9
跡取り	20.8	31.0	35.5	55.6	25 "	8.3	2.8	19.4	15.3
非跡取り	76.4	63.4	61.3	38.9	26 "	4.2	8.5	12.9	4.2
学歴					27 "	-	2.8	-	15.3
中卒	18.1	9.9	19.4	41.7	28 "	4.2	-	6.5	6.9
高卒以上	77.8	88.7	77.5	58.3	29 "	1.4	5.6	3.2	4.2

注) 表内の数値は%, 無回答者の比率は省略した。

表2 類型別在都市群とUターン群の離村時の生活意識

項目	在都市群			Uターン群	項目	在都市群			Uターン群
	都市型	変容型	村型			都市型	変容型	村型	
離村後の計画					離村に対する家族の態度				
都市永住予定	44.4	12.7	3.2	11.1	賛成だった	56.9	43.7	45.2	51.4
Uターン予定	2.8	39.4	38.7	50.0	どちらでもなかった	20.8	32.4	35.5	25.0
未定	52.8	47.9	58.1	38.9	反対だった	20.8	23.9	16.1	22.2
離村の相談					離村のすすめ				
した	62.5	69.0	48.4	68.1	あった	19.4	36.6	35.5	36.1
しなかった	37.5	31.0	51.6	31.9	なかった	79.2	63.4	64.5	63.9

離村の動機について、仕事、文化、勉学、人間関係等の項目を含む20項目の中から複数回答を認めて選択させたところ、都市型では、知識・技術を学べるから41.7%、働き場所があるから20.8%、よい学校があるから19.4%、レジャーを楽しめるから18.1%、変容型では、働き場所があるから36.6%、知識・技術を学べるから33.8%、よい学校があるから22.5%、働きながら勉強できるから22.5%、活気があるから21.1%、村型では、知識・技術を学べるから38.7%、働き場所があるから32.3%、等があがった(各種動機に関しては、回答率18%以上の上位5位以内を記述する)。いずれの類型においても、仕事と勉学の要因が重視されているが、都市型と変容型では若干これに文化的要因が加わっている。さらに、他青年の離村動機を推測させたところ、自己の離村動機に比べて、すべての類型において仕事の要因が最重視され、仕事のために都市へ出るという現実がよりはっきりと示された。

(3) 離村後の生活意識①(表3、表6参照)

離村後の実際の都会生活は、離村前に予想していた

生活と比べてどうかを尋ねたところ、予想以下だと答えた者は変容型で最も多く、都市型で最も少なく、村型は変容型に近いが両者の中間に位置する傾向がある。しかし態度類型の如何にかかわらず、都会生活が予想以下だと考えている者が結構多くみられる。都会生活の満足度については、満足している者の割合は変容型と村型に比べ都市型に多いが、在都市群を全体的にみると、収入や生活環境に対する不満が目立つ。

郷里との往来度については3類型間に違いはなく、表3に示さなかったが、郷里からの親戚・知人・友人の来訪頻度が村型でいくらか高い程度である。

(4) 離村後の生活意識②(表4、表6参照)

都会の生活と郷里の生活を比較して、都市型は都会の方がよいと、変容型は郷里の方がよいと認知する者が多く、村型は都会の方がよいと思う者と郷里の方がよいと思う者が半々である。Uターンについて実際に相談したことのある者は、変容型で6割を越えており、村型で4割弱、都市型でさえ3割にのぼり、Uターンをすすめられたことのある者も、変容型ではほぼ半数に達している。Uターンへの予備活動は、このように

表3 類型別在都市群とUターン群の離村後の生活意識

項目	群	在都市群			Uター ン群	項目	群	在都市群			Uター ン群
		都市型	変容型	村型				都市型	変容型	村型	
予想と比べた都会生活					都会生活の満足感						
A	予想以上	9.7	5.6	9.7	12.5	A	満 足	43.1	31.0	32.3	40.3
	予想通り	45.8	32.4	48.4	37.5	A	どちらでもない	38.9	49.3	41.9	34.7
	予想以下	38.9	59.2	38.7	43.1	A	不 満	16.7	18.3	22.6	22.2
B	予想以上	16.7	4.2	16.1	11.1	B	満 足	29.2	18.3	25.8	33.3
	予想通り	40.3	36.6	29.0	36.1	B	どちらでもない	37.5	28.2	22.6	22.2
	予想以下	37.5	56.3	51.6	45.8	B	不 満	29.2	49.3	48.4	43.1
C	予想以上	18.1	15.5	19.4	27.8	C	満 足	59.7	40.8	58.1	61.1
	予想通り	58.3	43.7	41.9	34.7	C	どちらでもない	29.2	36.6	25.8	20.8
	予想以下	23.6	39.4	38.7	33.3	C	不 満	11.1	22.5	16.1	18.1
D	予想以上	9.7	12.7	9.7	18.1	D	満 足	62.5	49.3	48.4	66.7
	予想通り	62.5	56.3	61.3	51.4	D	どちらでもない	26.4	35.2	41.9	23.6
	予想以下	27.8	31.0	29.0	27.8	D	不 満	11.1	15.5	9.7	9.7
E	予想以上	8.3	11.3	9.7	15.3	E	満 足	48.6	36.6	38.7	54.2
	予想通り	51.4	29.6	32.3	30.6	E	どちらでもない	27.8	29.6	19.4	23.6
	予想以下	40.3	57.7	58.1	51.4	E	不 満	23.6	33.8	41.9	22.2
帰省頻度					来訪頻度；家族						
	年1回未満	4.2	-	3.2	1.4		年1回未満	25.0	31.0	9.7	30.6
	年1～3回	41.7	43.7	41.9	63.9		年1～3回	38.9	46.5	54.8	55.5
	年4回以上	54.2	52.1	54.8	34.7		年4回以上	34.7	21.1	32.3	13.9

注) A：仕事，B：収入，C：人間関係，D：文化・娯楽，E：生活環境

表4 類型別在都市群の離村後の生活意識とUターン群の帰村時の生活意識

項目	群	在都市群			Uター ン群	項目	群	在都市群			Uター ン群
		都市型	変容型	村型				都市型	変容型	村型	
都会と郷里の生活比較					帰村に対する家族の態度						
	都会がよい	41.7	25.4	35.5	41.7		賛 成	59.7	66.2	61.3	84.7
	どちらでもない	38.9	33.8	32.3	15.3		どちらでもない	30.6	21.1	32.3	11.1
	郷里がよい	19.4	40.8	32.3	43.1		反 対	9.7	12.7	6.5	4.2
帰村の相談					帰村のすすめ						
	した	31.9	62.0	38.7	73.6		あ る	25.0	46.5	29.0	54.2
	しなかった	68.1	38.0	61.3	26.4		な い	75.0	53.5	71.0	45.8

変容型において活発であるが、Uターンに対する家族の態度には、各類型間に差がなく、賛成が約6割を占め、反対は非常に少ない。

ところで、在都市青年を現実に都市へ引き留めている留都市動機について尋ねてみると、都市型では、文化的で便利だから34.7%、知識・技術を学べるから25.0%、活気があるから25.0%、働き場所があるから22.2%、変容型では、知識・技術を学べるから35.2%、働き場所があるから29.6%、収入が多いから21.1%、村型では、働き場所があるから25.8%、知識・技術を学べるから22.6%、収入が多いから19.4%、となった。都市型では都市のもつ仕事や勉学の魅力以上に文化的魅力が重みをもっているが、変容型と村型では仕事や勉学のために現在も都市に留まっているという。

また、もしUターンすることになると仮定したらその動機となるのは何かと聞き、都市型では、病気になって30.6%、家のあつぎのため22.2%、郷里の環境のよさをみなおして22.2%、公害のため18.1%、変容型では、Uターン予定だったから33.8%、郷里の環境のよさをみなおして28.2%、家のあつぎのため23.9%、知識・技術を身につけたから23.9%、村型では、郷里で仕事が見つかったから25.8%、公害のため19.4%、郷里の環境のよさをみなおして19.4%、家のあつぎのため19.4%、が得られた。仮定されたUターン動機は、都市型に比べ変容型と村型でいくらかの郷里に対する積極的な帰村の姿勢がみられる。この変容型と村型の郷里肯定的帰村動機は、他青年のUターン動機を推測させた場合にもわずかな

表5 類型別在都市群の離村後の生活意識とUターン群の帰村後の生活意識

項目	群	在都市群			Uター ン群	項目	群	在都市群			Uター ン群
		都市型	変容型	村型				都市型	変容型	村型	
都会と郷里の生活比較					郷里生活の満足感(仮定)						
A	都会がよい	73.6	70.4	61.3	30.6	A	満足	2.8	5.6	12.9	38.9
	どちらでもない	19.4	14.1	22.6	44.4	A	どちらでもない	43.1	46.5	38.7	36.1
	郷里がよい	5.6	15.5	16.1	25.0	A	不満	54.2	47.9	48.4	23.6
B	都会がよい	73.6	77.5	74.2	47.2	B	満足	2.8	4.2	6.5	34.7
	どちらでもない	23.6	19.7	25.8	33.3	B	どちらでもない	31.9	31.0	32.3	25.0
	郷里がよい	-	2.8	-	19.4	B	不満	65.3	63.4	61.3	40.3
C	都会がよい	18.1	14.1	6.5	25.0	C	満足	33.3	35.2	45.2	38.9
	どちらでもない	66.7	54.9	61.3	44.4	C	どちらでもない	41.7	50.7	41.9	38.9
	郷里がよい	15.3	31.0	32.3	30.6	C	不満	25.0	14.1	12.9	22.2
D	都会がよい	87.5	85.9	83.9	76.4	D	満足	4.2	1.4	3.2	15.3
	どちらでもない	12.5	12.7	16.1	16.7	D	どちらでもない	16.7	19.7	32.3	25.0
	郷里がよい	-	1.4	-	6.9	D	不満	79.2	78.9	64.5	59.7
E	都会がよい	20.8	18.3	19.4	15.3	E	満足	45.8	43.7	51.6	43.1
	どちらでもない	37.5	33.8	38.7	33.3	E	どちらでもない	36.1	38.0	22.6	34.7
	郷里がよい	41.7	47.9	41.9	51.4	E	不満	18.1	18.3	25.8	22.2
在村青年に対する態度					Uターン青年に対する態度						
離村をすすめる		5.5	2.8	-	20.8	離村をすすめる		2.8	-	3.2	/
どちらでもない		58.3	43.7	41.9	51.4	どちらでもない		59.7	35.2	32.3	
留村をすすめる		36.1	53.5	58.1	26.4	留村をすすめる		37.5	63.4	64.5	
在都市青年に対する態度					Uターン増減予想						
留都市をすすめる		4.2	-	3.2	2.8	増加する		56.9	62.0	64.5	/
どちらでもない		90.3	84.5	74.2	62.5	どちらでもない		18.1	25.4	29.0	
帰村をすすめる		5.6	15.5	22.6	33.3	減少する		25.0	12.7	6.5	

注) A:仕事, B:収入, C:人間関係, D:文化・娯楽, E:生活環境

がらうかがえる。

(5) 離村後の生活意識③(表5、表6参照)

離村後の現在、都会の生活と郷里の生活のどちらがよいと認知しているかという点については、在都市群では全体的にみて、仕事、収入、文化・娯楽面で都会の方がよいと思う者が多く、生活環境面では郷里の方がよいと思う者が多く、人間関係面ではどちらともいえない。これらの項目に関して、類型間の差異はあまり明瞭ではないが、都市型に比べ、変容型と村型に郷里の方がよいと認知している者の割合がやや大きい。そして、もしUターンして郷里へ帰ったと仮定したら、郷里の生活にどれくらい満足できるかを答えさせたところ、人間関係と生活環境の面を除く他の面では、不満だろうと考えている者が圧倒的に多い。類型間の差異は、わずかに仕事と人間関係の面で都市型に郷里生活を不満だろうと答えた者が多いほかは見当たらない。

他青年に対する態度を検討してみると、変容型や村型に比べて、都市型は、在村青年に対して留村をすすめること、他の在都市青年に対して帰村をすすめること、Uターン青年に対して留村をすすめること、が少ない。在都市群を全体的にみると、他青年に対してど

うすすめたらよいかかわからない者が相当数にのぼるが、どちらかといえば都市志向よりも村志向をすすめる方が多い。そして、Uターン現象が今後どうなるかについては、いずれの類型でも増加するだろうとみている者が多いが、それは村型で最も顕著であり、次に変容型、都市型の順である。なお、老後の居住地はどこを希望するかとなると、都市型では、都会希望19.4%、どちらでもない40.3%、郷里希望40.3%、変容型では、順に2.8%、19.7%、77.5%、村型では、9.7%、19.4%、71.0%であり、都市型でさえ老後を郷里で送ることを希望している者が多く、変容型と村型でその割合はさらに高くなる。

なお、本研究では基本的な生活態度の変容から在都市青年を3類型に分けたが、その類型のもつ都市—村志向性が生活意識の分析から十分に裏付けられた。

2 態度類型別在都市群とUターン群の生活意識の比較

ここでは、都市型、変容型、村型の各在都市青年が実際にUターン行動をとって現在郷里で生活しているUターン青年と生活意識においてどのような類似性、

表6 生活意識に関する在都市群の類型間比較、およびUターン群と類型別在都市群の比較 ( $\chi^2$ 検定)

時期 都U	項目 (差の意味)	在都市群における類型間比較			Uターン群vs類型別在都市群		
		都:変	都:村	変:村	U:都	U:変	U:村
離村時	離村後の計画 (Uターン予定だった)	<***	<***		>***		
	離村の相談 (相談した)			>+			>+
	離村の勧め (勧めがあった)	<* <+	<+ <+		>* >*		
	離村に対する家族の態度 (反対だった)	<+	<+				
離村後	予想と比べた A 仕事 (予想以下)	<* <*		>+		<+	
	都会生活 B 収入 ( " )	<*				<+	
	C 人間関係 ( " )	<*				<+	
	D 文化・娯楽						
	E 生活環境 ( " )	<*	<+				
	都会生活の満足感 A 仕事						
	B 収入 (不満)	<* <*	<+			<*	
	C 人間関係 ( " )	<*				<*	
	D 文化・娯楽 ( " )					<*	<+
	E 生活環境 ( " )					<*	<*
帰省頻度 (年4回以上)				<*	<*	<+	
来訪頻度 A 家族 ( " )				<***		<*	
B 親戚・知人・友人 ( " )		<+	<***			<+	
帰村時	都会と郷里の生活比較 (郷里の方がよい)	<*			>***	<*	
	帰村の相談 (相談した)	<***		>*	>***		>***
	帰村の勧め (勧めがあった)	<***		>+	>***		>*
	帰村に対する家族の態度				>***	>***	>***
在	都会と郷里の生活比較 A 仕事 (郷里の方がよい)	<+	<+		>***	>***	>***
	B 収入 ( " )				>***	>***	>***
	C 人間関係 ( " )	<*	<+				<*
	D 文化・娯楽 ( " )				>+		
	E 生活環境						
	郷里生活の満足感 A 仕事 (満足)				>***	>***	>***
	B 収入 ( " )				>***	>***	>***
	C 人間関係						
	D 文化・娯楽 ( " )				>*	>***	>+
	E 生活環境						
	在村青年に対する態度 (留村をすすめる)	<*	<*		<***	<***	<***
	在都市青年に対する態度 (帰村をすすめる)		<*		>***	>*	
	Uターン青年に対する態度 (留村をすすめる)	<***	<*				
Uターン増減予想 (増加する)		<*					
老後の希望居住地 (郷里)	<***	<+		>***	<+		

(注) 表内の不等号は差の方向を示す;  $\chi^2$ 検定の自由度はすべて1; \*\*\* $P < .001$ , \*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ , + $P < .10$

差異性を有するがを示すことにより、在都市青年のUターン可能性の問題を考える際の一助としたい。

(1) 対象者の特性 (表1参照)

在都市群とUターン群の特性を比較してみると、性別、結婚には差がなく、年齢について都市型と変容型の在都市群がUターン群よりも年長者が少ない。そして、興味ある特徴として、Uターン群は、在都市群のどの類型よりも、跡取りと中卒者の比率が大である (自由度1の $\chi^2$ 検定の結果すべて5%以下の危険率で有意差あり)。

(2) 類型別在都市群とUターン群の離村時の生活意識の比較 (表2、表6参照)

離村時に、将来いつか郷里に帰ろうというUターン計画をもって離村した者は、各在都市群よりもUターン群に多いが、有意差があったのは都市型在都市群との間だけである。離村の相談やすすめに関しては、取り立てて言うほどの差異はないし、離村に対する家族の態度も各在都市群とUターン群間に差はない。

Uターン群の離村動機は、知識・技術を学べるから44.4%、干渉が少ないから20.8%、働き場所があるから18.1%、等であり、人間関係の要因が離村動

機の一部を占めている点が、各在都市群と多少異なるが、他青年の離村動機の推測に関しては、在都市群のそれと類似した結果を示す。

### (3) 類型別在都市群とUターン群の離村後の生活意識の比較(表3、表6参照)

離村前に予想していた都会生活と現実の都会生活を比較して、Uターン群は各項目について3~5割の者が予想以下だったと答えているが、在都市各群もこれと同じような認知をしており、両群間に差異はほとんどない。むしろ、変容型在都市群は仕事と人間関係の面でUターン群よりも予想以下だと言う者が多いほどである。都会生活の満足度に関しても、都市型在都市群とUターン群は類似しているが、変容型と村型の在都市群は、Uターン群が都会生活時に抱いていた満足感よりも低い満足感を報告しており、都市生活に対する不満が大きい。

郷里との往来度については、帰省頻度、来訪頻度とも、Uターン群の都市生活時よりも在都市群の方が高く、郷里とのつながりが強いように思われる。

### (4) 類型別在都市群の離村後の生活意識とUターン群の帰村時の生活意識(表4、表6参照)

次に、Uターン青年が帰村を決意した時期の生活意識と在都市青年の現在の生活意識を比較する。都会と郷里の生活については、Uターン群に比べ、都市型在都市群では郷里生活がよいと答えた者が少なく、変容型在都市群では逆に都会生活がよいと答えた者が少なく、村型在都市群はUターン群と同じ傾向を示す。Uターンの相談をした者やUターンのすすめを受けたことがある者は、都市型と村型の在都市群ではUターン群より少ないが、変容型在都市群の場合はUターン群と変わらぬほど多い。帰村に対する家族の態度は、Uターン群の帰村時の方が、各在都市群の現在よりも賛成が多い。

Uターン群の帰村動機は、家のあつぎのため34.7%、家のすすめで32.3%、Uターン予定だったから33.3%、都会生活になじめなくて20.8%、郷里の環境のよさをみなおして19.4%、等で、各在都市群の仮定された帰村動機と比べ、家の事情による帰村の決意が特徴的である。

### (5) 類型別在都市群の離村後の生活意識とUターン群の帰村後の生活意識(表5、表6参照)

都市生活中の在都市群と郷里生活中のUターン群に対し、郷里と都会の生活を比較させた。その結果、仕事と収入の面では、Uターン群が各在都市群よりも郷里の方がよいと認知している者が多く、文化・娯楽面では同様な差が都市型在都市群に対してのみみられる。しかし、人間関係面では、逆に村型在都市群がUター

ン群よりも郷里の方がよいと認知している。Uターン群の郷里生活の満足度は、各在都市群の仮定された郷里生活の満足度よりも総じて高いことが示される。

他青年に対する態度に関しては、各在都市群に比べ、Uターン群には、在村青年に対して離村を、在都市青年に対しては帰村をすすめる者が多い。一見矛盾したこの態度は、Uターン青年が他青年に対し、内地留学的離村をすすめていると解釈される。なお、老後の居住地については、Uターン群(都会で5.6%、どちらでもない30.6%、郷里で63.9%)に比べ、郷里の方を希望する者の割合は、都市型在都市群で少なく、変容型在都市群で逆に多く、村型在都市群で同じくらいである。

### 3 在都市青年のUターン可能性

現在、在都市青年がUターン青年の帰村時と非常に類似した基本的な生活態度を保有していることから、Uターン予備軍の存在が先の研究(小川・深田、1975、1977)で示唆された。この示唆を受けて、在都市青年のUターン可能性の問題を検討するために、彼らの離村態度と現在の態度の組合せから態度変容パターンを求め、得られた態度類型別に在都市青年の生活意識を検討してきた。

その結果、都市型在都市青年は、変容型や村型の在都市青年に比べて、もともと都市永住を計画して離村した者が多く、都会生活ををより肯定的に認知し都会生活により満足しており、たとえ郷里に帰ったとしても、郷里生活には不満だろうと考えている。都市型在都市青年の留都市動機は、単に仕事や勉学のためではなく、むしろ第1に都会のもつ文化的魅力に帰することが明らかとなったし、もしUターンするとしたら帰村動機を仮定させた場合も、他の型に比べ、郷里に対する積極的姿勢での帰村があまり期待できないことが示された。実際にUターンの相談をしている者も、Uターンのすすめを受けた者も少ないし、在村青年やUターン青年に対する態度をみても、村に留まるようにすすめる者は他の類型よりも少なく、反郷里志向性が強い。したがって、都市型在都市青年のUターン可能性は極めて薄いと考えられる。

一方、変容型と村型の在都市青年は、将来いつかUターンしようという計画をもって離村した者が約4割も占め、離村動機も仕事や勉学のためという面がより明白であり、都会生活は予想以下だと認知している者が、項目によっては半数以上に達し、文化・娯楽、人間関係を除く他の面では、都会生活に対する不満が相当大きい。都会と郷里の生活比較を項目別に行わせた場合には、人間関係と生活環境の面を除くと、都会の

方がよいと認知する者が多く、もし郷里へ帰ったとしても不満だろうと言う者が多いが、生活全体を判断させた場合には、変容型在都市群ではむしろ郷里の方がよいという認知が多く、村型在都市青年でも郷里の方がよいという認知と都会の方がよいという認知がほぼ半々の割合でみられる。変容型と村型の在都市青年の留都市動機は仕事と勉学のためという内容のものであり、仮定されたUターン動機は家からの働きかけとともに郷里の魅力がその中心を占めている。また、変容型在都市青年の6割以上がUターンの相談をしており、半数近くがUターンをすすめられた経験をもっている。それゆえ、変容型と村型の在都市青年の場合は、将来郷里へUターンする可能性を十分秘めていると言える。

以上のごとく、都市型在都市青年のUターン可能性は低い。変容型と村型の在都市青年においては、その可能性が十分考えられることが明らかとなった。このことは、類型別在都市青年を、実際にUターン行動をとったUターン青年と比較することによって一層明確になった。

すなわち、都市型在都市青年は、ほとんどの生活意識において、Uターン青年よりも都会志向的傾向を有し、Uターン青年と大きく異なることが示された。しかし、変容型と村型の在都市青年には、Uターン予定をもって離村した者がUターン青年の場合に迫るほど多く、Uターン青年の都会生活時よりも都会生活に不満を感じている者が多く、また、変容型在都市青年には、都会生活は予想以下だと認知している者がUターン青年の都会生活時よりも多い。都会と郷里の生活について、村型在都市青年は、Uターン青年が帰村時に抱いていた認知とほぼ同様な傾向を示し、変容型在都市青年は、それよりさらに郷里に対して肯定的な認知をしている。実際行動である帰村の相談やすすめについても、変容型在都市青年はUターン青年の帰村時と非常に類似した面を示す。ただし、項目別の郷里生活と都会生活の比較および郷里生活の満足感については、変容型と村型の在都市青年とUターン青年との間に差のみられる項目があった。このように、変容型と村型の在都市青年は、Uターン青年の都会生活時と比較的よく似た生活意識を保有していることがわかった。

変容型と村型の在都市青年では、仕事と勉学が彼らを都市に引き留めている主な要因であるので、もともと内地留学型の多い両在都市青年の場合は、一応の知識・技術を身につけた段階ならば、郷里の受け入れ態勢さえ整えばUターンに踏み切る可能性が非常に大きい。郷里の受け入れ条件としては、やはり仕事が見つかること、あるいはその見通しが得られることが

必須の条件のように思われる。そして、Uターンの決意を促すもう1つの重要な条件は、帰村に対する家からの働きかけなどを含む家の事情の変化であろう。

先の研究(小川・深田, 1975, 1977)で示したように、Uターン青年が郷里に定着して安定した生活を営んでいる郷里の現状が、在都市青年のUターン行動の触発に相当の影響を及ぼすことが考えられる。その点、在都市青年の郷里との往来は、帰省、来訪とも非常に密であり、郷里の情報に接する機会は十分あると思われるので、Uターンの決意に役立つ情報の蓄積も可能であろう。

したがって、村型在都市青年と変容型在都市青年は、Uターンを起すだけの条件をすでにかなりの程度備えていると考えられ、状況の変化次第で、Uターン行動が生じる可能性は相当大きいと思われる。しかも、変容型在都市青年は、小川・深田(1977)の都会失望・郷里再認識型の積極的Uターン、あるいは半田(1973)の郷土再発見型のUターン、村型在都市青年は、前者の村一貫志向の自発的・積極的Uターン、あるいは後者の内地留学型のUターンに対応する特徴を備えていると考えられ、両在都市青年には、都市生活の落伍者といった暗い消極的・受動的なUターン・イメージはなく、積極的で意欲的なUターンが期待されてよいのではなかろうか。

## 要 約

われわれは、先の研究(小川・深田, 1975, 1977)で、過疎地域から離村して現在都市で生活している在都市青年の村志向的態度が増加してきていることから、潜在的Uターン群の存在を示唆した。この示唆を受けて、本研究では、在都市青年のUターン可能性の問題を、彼らの生活意識の分析を通して解明することを目的とした。

対象地区は中国山地の過疎地である島根県頓原町、広島県筒賀村、吉和村の3地区であり、19歳以上29歳以下の青年男女、在都市青年183名とUターン青年72名に対して主として郵送法によって調査を実施した。調査には、離村時から現在に至るまでの生活意識を問う35項目の過疎調査票を使用した。分析手続きとしては、在都市青年の離村時と現在の基本的生活態度の組合せから態度変容パターンを求め、在都市青年の態度の類型化を試み、都市志向一貫型(都市型, 72名)、都市—村志向変容型(変容型, 71名)、村志向一貫型(村型, 31名)の3類型を見出した。

生活意識に関して、この在都市群3類型間の比較、および類型別在都市群とUターン群との比較を行い、

次の結果を得た。都市型在都市青年に比べ、変容型と村型の在都市青年は、生活意識のあらゆる面において都会生活に対する認知がより非好意的であり、都会生活に対する感情もよりネガティブであることが示された。また、都市型在都市青年はUターン青年と著しく異なる生活意識をもつが、変容型と村型の在都市青年はUターン青年と比較的類似した生活意識をもつことが判明した。

したがって、変容型と村型の在都市青年は、Uターンに踏み切るだけの条件をすでにかなりの程度備えており、たとえば郷里で仕事が見つかるか、帰村に対する家からの強力な働きかけがあるなどの状況の変化次第で、Uターン行動をとる可能性が相当大であろうと考えられた。しかも、両在都市青年には、内地留学的、郷里再認識的な積極的、意欲的Uターンを期待することができる。

## 引用文献

- 安達生恒 1973 「むら」と人間の崩壊——農民に明日があるか——三一書房。
- 相原次男 1973 青少年の流出とUターン 末吉悌次(編著)「現代社会と人間形成」帝国地方行政学会。242—252。
- 中国新聞社(編) 1967 中国山地「上」未来社。
- 中国新聞社(編) 1968 中国山地「下」未来社。
- 半田次男 1973 Uターン者の動向と地域開発の課題(Ⅱ)——各県にみるUターン現象とUターン要因の分析——地域経済研究年報、第9巻、1—20。
- 早川昌範 1972 過疎と住民意識(山陰文化シリーズ42) 今井書店。
- 池上徹 1975 日本の過疎問題 東洋経済新報社。
- 今井幸彦(編著) 1968 日本の過疎地帯(岩波新書678) 岩波書店。
- 内藤正中 1971 過疎対策(山陰文化シリーズ39) 今井書店。
- 乗本吉郎 1970 過疎地域の開発方向(山陰文化シリーズ35) 今井書店。
- 小川一夫・深田博己 1975 過疎地域青年の生活態度の変容——中国山地のUターン現象——年報社会心理学、第16号、69—83。
- 小川一夫・深田博己 1977 過疎地域青年のUターン行動の実証的研究 実験社会心理学研究、第16巻、第2号、110—120。
- 大谷武嘉 1970 過疎町長奮闘記(山陰文化シリーズ34) 今井書店。
- 寺本彦(編著) 1969 過疎と教育 報光社。
- 続有恒ほか 1970 いわゆる過疎地域の家族関係(1)——序報(その1)——名古屋大学教育学部紀要、第17巻、47—62。
- 山野井敦徳 1973 過疎の地域類型 末吉悌次(編著)「現代社会と人間形成」帝国地方行政学会。230—241。
- 米山俊直 1969 過疎社会(NHKブックス99) 日本放送出版協会。
- 結城清吾 1970 過疎・過密——歪められた日本列島——(三一新書691) 三一書房。

## 〈付記〉

調査に際しては、頓原町信高収入役(前教育長)、森山教育長、安部社会教育主事、箇賀村の森村長、河本産業係長、高杉教育長、吉和村の森本村長、森本教育長ら多くの関係者のご援助と、3地区の青年の方々の積極的なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Life Consciousness of Young People in Depopulated Areas  
— U-turn Probability of Young People Having Left Their  
Home Villages to Live in Urban Areas —

Kazuo Ogawa and Hiromi Fukada

Our previous studies (Ogawa & Fukada, 1975, 1977) suggested that a considerable number of the young people who had left their home villages to live in urban areas might come back to their homes. This study focused on the probability of U-turn behavior among the young people who had left their native villages to live in urban areas. U-turn behavior was defined as young people returning to their rural villages after having left there to work or study in urban areas.

183 young people, 19–29 years of age, who had left their home villages to live in urban areas were investigated in three depopulated villages, Tonbara (Shimane Prefecture), Tsutsuga and Yoshiwa (Hiroshima Prefecture). All of them are remote and secluded villages in the Chugoku mountains. This group was compared with the U-turn group of 72 young people who had U-turned to their home villages. Present survey was conducted through the mail, using the 35 item Depopulation Questionnaire.

The following results were found. The subjects could be grouped into three different types according to their basic life attitudes both at the time when they had left their villages and when their later urban life was surveyed by us: (a) Urban-Oriented Type, 72 young people who had been willing to leave their native villages and satisfied with the urban life, (b) Urban-Rural Unsettled Type, 71 young people who had been willing to go to urban but disappointed with the urban life, (c) Rural-Oriented Type, 31 young people who had had to leave their home villages for urban areas in order to work or go to school, but not wanted to live there. With regard to life consciousness, each of these three types was compared with the rest two types and the U-turn group. Consequently, it was showed that young people of Urban-Rural Unsettled Type or of Rural-Oriented Type were under such conditions as to motivate them for U-turn behavior, but not young people of Urban-Oriented Type. Finally, it was suggested that many of the young people of the former two types would U-turn to their home villages if the circumstances surrounding them changed, e.g., they could find a job in their home villages; their families badly wanted them to U-turn; etc.